

第七十五回広島市短詩型文芸大会優秀作品集（簡易版）

第七十五回目となる「広島市短詩型文芸大会」が、本年十一月八日に開催されました。多くの皆様にご応募いただき厚くお礼申し上げます。

この大会は、昭和二十六年（一九五一年）、戦後のまだ物質的に豊かでない時代に、市民の心の復興の一助にという願いから開始されて以来、市民文芸を愛する多くの方々に支えられ、毎年度開催してきました。成熟社会を迎えるとともに、高齢社会となり、新たな課題が顕著になった今日においても、多様な文化を振興し、市民が豊かで生き生きと暮らせるまちをつくるうえで、この大会の意義は大きいと考えており、今後も長く継続することを願っております。

今回の大会では、二百五十二名の皆様に六百九十九の作品をご応募いただきました。はじめてご応募いただいた方から、長年ご応募いただいている方まで、多くの皆様にご参加いただき、心から喜んでおります。

ここに、今回の大会で選ばれた優秀作品をご紹介します小冊子を発行いたしました。皆様の今後の活動にお役立ていただければ幸いです。

終わりに、第七十五回「広島市短詩型文芸大会」の開催にご尽力された関係者及びご応募いただきました皆様に重ねて深く感謝申し上げますとともに、この大会が、広島好文芸を愛する皆様の創作活動の一助になりますことを祈念いたしまして、巻頭のごあいさつにさせていただきます。

令和七年十二月

（公財）広島市文化財団
中央公民館館長 梶山英治

第七十五回広島市短詩型文芸大会 選者紹介（敬称略）

【俳句の部】 鈴木厚子

【詩の部】 北村 均

山口美智

岡馬重充

水口佳子

石橋康徳

吉原文音

【川柳の部】 森崎八重子

常國喜好

永井有三

浅原志ん洋

【短歌の部】 山本光珠

岩本幸久

弘兼秀子

山本恵子

俳句

△広島市長賞▽

稲の波おぼれさうなる一軒家

加藤 和子

△広島市教育長賞▽

初夏のひかりを握る赤ん坊

高田 久美代

△広島市中央公民館長賞▽

四万六千日眼球に小宇宙

河上 志麻子

△入選▽

明けやらぬ川面の黙や原爆忌

新山 新

梅漬の日付大きく甕の腹

川手 和枝

誰ひとり戻らぬ畑に桐一葉

廣田 厚子

城跡の闇大いなり虫すだく

堀向 博子

節くれだつ指が鶴生むひろしま忌

大久保 信子

すれ違ふ人に花びら移りけり

堀田 ちえみ

稲刈るや峡の入日を巻き込みて

大上 充子

青葉冷キャンパス地下の不発弾

菅原 理恵

曾祖父母以前は知らず門火焚く

石井 九峰

廃線の鉄路や蕎麦の花明かり

藤谷 知子

また一枚捨田となりて曼珠沙華

池田 萩邨

原爆忌鳩の輪郭だけが飛ぶ

河上 志麻子

指揮台に指揮者飛び乗る盛夏かな

松本 直美

ジオラマに見紛ふ尾根や秋日澄む

廣津 敦子

ヴィーナスの広き背中や巴里祭

楯 幸子

日盛りを来て千畳の堂に座す

若本 鴻遊

いづれ一人ふたりの仰ぐ天の川

細木 復恵

安らふや瑞穂の国の稲明かり

加藤 和子

△選者選▽

鈴木厚子選

稲の波おぼれさうなる一軒家
明けやらぬ川面の黙や原爆忌
安らふや瑞穂の国の稲明かり

加藤 和子

新山 新

加藤 和子

山口美智選

初夏のひかりを握る赤ん坊
また一枚捨田となりて曼珠沙華
梅漬の日付大きく甕の腹

高田 久美代

池田 萩邨

川手 和枝

水口佳子選

四万六千日眼球に小宇宙
原爆忌鳩の輪郭だけが飛ぶ
指揮台に指揮者飛び乗る盛夏かな

河上 志麻子

河上 志麻子

松本 直美

石橋康徳選

誰ひとり戻らぬ畑に桐一葉
いづれ一人ふたりの仰ぐ天の川
節くれだつ指が鶴生むひろしま忌

廣田 厚子

細木 復恵

大久保 信子

吉原文音選

初夏のひかりを握る赤ん坊
曾祖父母以前は知らず門火焚く
稲の波おぼれさうなる一軒家

高田 久美代

石井 九峰

加藤 和子

短歌

△広島市長賞▽

からからと貝風鈴の呼びめるは珊瑚の海のうからともがき

永井 勝弘

△広島市教育長賞▽

帰去来の思いに惑う秋の暮れ山河ばかりが待つとは言えど

金子 文彦

△広島市中央公民館長賞▽

ひまわりを束ねるように固まってねむる吾子らに毛布を掛ける

箭田 儀一

△入選▽

螢飛び小川の水の澄みし頃帚木を翳し友垣の声

天野 房子

一本の藁一瞬を燃えあがり土に沈みぬ火櫓の皿

伊藤 恒子

不足分の旅費を持せて投函す十年前の卯年のはがき

高本 澄江

ストアーに選る水色のマニキュアよ指をかの日の恋でふちどる

宮田 則子

折鶴のお焚上げかな碧天へ立つ一筋の淡きけむりは

斎藤 金二

しつてゐる武器を持たざるでのひらのその柔きことあなたもアナタも

水口 佳子

炎昼に叫ぶカンナの声がする陽炎ゆれる鉄路のむこう

森本 直美

葉の榊手づから受けし初恋は妹背の滝のまんさくの紅

斉藤 恵子

草冠、のぎ偏なべて靡かせて川原に秋の風吹きぬける

正藤 陽子

△選者選▽

山本光珠選

歸去来の思いに惑う秋の暮れ山河ばかりが待つとは言えど

金子 文彦

螢飛び小川の水の澄みし頃帚木を翳^{かざ}し友垣の声

天野 房子

からからと貝風鈴の呼びゐるは珊瑚の海のうからともがき

永井 勝弘

炎昼に叫ぶカンナの声がする陽炎ゆれる鉄路のむこう

森本 直美

ひまわりを束ねるように固まってねむる吾子らに毛布を掛ける

箭田 儀一

葉^はの榊^{しおりて}手づから受けし初恋は妹背^{いもせ}の滝のまんさくの紅^{べに}

斉藤 恵子

草冠、のぎ偏なべて靡かせて川原に秋の風吹きぬける

正藤 陽子

岩本幸久選

からからと貝風鈴の呼びゐるは珊瑚の海のうからともがき

永井 勝弘

一本の藁一瞬を燃えあがり土に沈みぬ火襷の皿

伊藤 恒子

不足分の旅費を持せて投函す十年前の卯年のはがき

高本 澄江

ひまわりを束ねるように固まってねむる吾子らに毛布を掛ける

箭田 儀一

ストアーに選る水色のマニキュアよ指をかの日の恋でふちどる

宮田 則子

折鶴のお焚上げかな碧天へ立つ一筋の淡きけむりは

斎藤 金二

しつてゐる武器を持たざるてのひらのその柔きことあなたもアナタも

水口 佳子

詩

△広島市長賞▽

錆びた缶

山口 みそひと

とある国のとある都市のとある観光地

地下鉄の最寄り駅から

入口までは徒歩で数分

大勢の人達が行き交う

入口の門が見えた

黄金のように光り輝いている

本物の黄金を見たことはないけれど

とても煌びやかな場所だ

門をくぐった少し先に

数多くの店が軒を連ねている

その手前の道の外れ

照明が当たらない

煌びやかではないところに

人影が見えた

女性が一人で座り込んでいる

左腕の肘から先が無い

質素なシャツにズボン

年齢は五十〜六十歳くらいだろうか

履きつぶした靴の前に

錆びた缶を置いて

その中身は空だった

この国では電子マネー化が進んでいる
現金を見かけない

数年前は見かけたが

以前の滞在で余った現金も

居場所はずっと財布の中

ならばと錆びた缶に入れた

すると女性が言葉を発した

「謝謝」と

とても穏やかで

温もりのある一言だった

近くで見ると

女性は右目しか開いていない

質素な服はぼろぼろの服だ

かなりやせ細っている

どのような人生を過ごしてきたのだろう

どうして左腕の肘から先が無いのだろう

なぜ今ここに錆びた缶を置いているのか

私は何も知らない

しかし「謝謝」の一言が

心に染み入ったのは確かだ

これほど純粹で

単刀直入な一言

聞いたのはいつ以来だろう

母の「おかえり」や「行ってらっしゃい」

娘の「大好き」くらいしか思い浮かばない

いやもしかしたら

他にもあったのかも知れない
気が付かなかっただけで

帰り道

同じ門から駅へと戻る

女性は同じ場所にいた

錆びた缶も同じ位置

だけど中身は少し増えていた

△広島市教育長賞▽

野あざみのカフェ

高橋 克知

桜に若葉が芽吹く頃

数年ぶりにカフェを訪ねた

参道脇の橋を渡り 店に入ると

野あざみが せっせと働いていた

エプロンは 私のスカーフと同じ赤紫色

オーダーを伝票に書くと 厨房に行き

ステンレスのフライパンにバターを落として

白身魚と香草をソテーしていた

例祭帰り

石階段を下っていると 淡い靄の中で

花の姿にかえていたのだと言う

リーフティーを茶漉しで抽出しながら

野あざみが 目を細めて淡々と話すのを
白身魚をせせりながら

ほうほうと 頷いて聞いていた

紅茶に 蜜を落として

赤紫色のエプロンを眺めている

私の他に客のいない午後

蔓草模様のカーテンから 西日が射して

遠い景色のように かすんで見えた

店を出て 橋を渡り

夕若葉の参道を通り過ぎていく

石階段を下っていると 靄が立ち籠めはじめた

原生林の根元に咲く赤紫の群生を

ばんやりと 思い浮かべていたら

カフェは数年前に閉店していた事を思い出す

スカーフに蜜の気配がした

瞼をひらくと 私は 野あざみにかえていた

△広島市中央公民館長賞▽

水たまり

はしのぶしげ

八月が夏の熱気を運び出せず 九月が
秋を背負って残暑を掃きだしている
涼しい風が川沿いを歩いているわたしの
ほほを撫でて通り過ぎ 直角に長く伸
びた道端の雑草を揺らした
土手の階段にすわり 雨上がりの青い
空を見上げると 太陽が一番高いところ
から一番低い川面に輝く光を落としている

河原に目を移すと 乾いた遊歩道に水
たまりが二つできている

一つは頭の大きさぐらいで道の真ん中に
もう一つは手のひらサイズで道の隅に

大きい水たまりは濁っていて 小さい水
たまりは透き通っている

やわらかい陽光に包まれ 水たまりを見
つめていると水に深入りする

わたしは透明の水たまりにあこがれる
透明の水たまりは純粋な幼児の感情だ
泣きたい時に泣き 笑いたい時に笑う
そこにはなんのためらいもない

大きい水たまりはわたしだ
濁って底が見えないわたしの感情は見
栄と打算でどろどろしている

いやなことをいやといわず

怒りたいのに黙ってやりすごし

水の中に感情を閉じ込める

周りと同化することに慣れたわたし

後悔の塊が水たまりの底から

ぶくぶくと湧き出てくる

遊歩道を歩いてきた二人の若者が

水たまりにわざと足を入れぴちゃぴち

やと水をはねて通り過ぎた

「わっ」

思わず声が出た

大きい水たまりはさらに濁り 小さな

水たまりも濁っている

人と交わることで水は濁るのだ

わたしはなぜかほっとした

川 柳

△広島市長賞▽

語り部を食い入るように子らの顔

山田 伸恵

△広島市教育長賞▽

肩書きが取れて変わった風の向き

野高 善子

△広島市中央公民館長賞▽

風見鶏たまには逆を向いてみる

田坂 千恵子

△入選▽

自分史の余白に未完の未来絵図

大杉 卓雄

胸奥に未だ抜けない棘がある

吉村 充

切り札が未だない助走まだ続く

江川 美栄

堪り兼ね孫が顔出すかくれんぼ

坪井 環

過去とだけ遊べる母の認知症

豊田 芳香

リビングにドンと置かれたすべり台

岡田 郁枝

お互いに気づかぬふりのすきま風

池田 久美子

都合良く聞き分けているロボの耳

鴨田 昭紀

良いことは互いに分けて笑い合う

ようこ

ポジティブに受けとりましょうその言葉

池田 久美子

聞く耳を持たぬ過信の絶頂期

大杉 卓雄

AIに聞いてみるのも一つの手

松下 和紘

今日こそは明日こそはで古稀が過ぎ

鑑原 義則

明日への夢も描ける恢復度

吉川 美佐子

生きてます明日の余命も知らぬまま

豊田 芳香

兼題 「未だ」

森崎 八重子 選

特選 自分史の余白に未完の未来絵図

大杉 卓雄

特選 胸奥に未だ抜けない棘がある

吉村 充

特選 切り札が未だない助走まだ続く

江川 美栄

佳作 未だ来ぬ世界の平和祈る朝

中森 明子

佳作 首横に振って未だに蚊帳の外

松尾 信彦

佳作 女房に未だに言えずありがとう

竹木 志歩

佳作 閻魔から招待状は未だ来ない

鴨田 昭紀

佳作 20 年未だ敬語の娘婿

さくりん

兼題 「遊ぶ」

常國 喜好 選

特選 堪り兼ね孫が顔出すかくれんぼ

坪井 環

特選 過去とだけ遊べる母の認知症

豊田 芳香

特選 リビングにドンと置かれたすべり台

岡田 郁枝

佳作 おままごと声のトーンもママに似る

池田 久美子

佳作 余るほど自由何して遊ぶうか

福澤 ちずこ

佳作 また一人遊び仲間の訃報きく

熊川 勝彦

佳作 再開発のはずが今なお遊休地

土居 直子

佳作 もう少し遊べと海馬紙とペン

吉川 美佐子

兼題 「風」

永井 有三 選

特選 肩書きが取れて変わった風の向き

野高 善子

特選 風見鶏たまには逆を向いてみる

田坂 千恵子

特選 お互いに気づかぬふりのすきま風

池田 久美子

佳作 田舎では今も昔の風が吹く

鑑原 義則

佳作 風ばかり読んで忘れてゆく自分

黒飛 義竹

佳作 いろいろな風に吹かれて好好爺

山本 一

佳作 公園の砂場に風の子がない

鴨田 昭紀

佳作 波風も大事なサプリ老い夫婦

福澤 ちずこ

兼題 「良い」

浅原 志ん洋 選

特選 都合良く聞き分けているロバの耳

鴨田 昭紀

特選 良いことは互いに分けて笑い合う

ようこ

特選 ポジティブに受けとりましょうその言葉

池田 久美子

佳作 腕が立つお医者様だが無愛想

近末 夕子

佳作 機嫌良いらしいよく食べよく笑う

羽城 裕子

佳作 良い人のふりをあきらめ楽になる

熊谷 純

佳作 褒め言葉あなたが言うとか気味悪い

田坂 千恵子

佳作 悪くないまあまあ程度で良しとする

鑑原 義則

兼題 「聞く」

弘兼 秀子 選

特選 語り部を食い入るように子らの顔

山田 伸恵

特選 聞く耳を持たぬ過信の絶頂期

大杉 卓雄

特選 AIに聞いてみるのも一つの手

松下 和紘

佳作 八十年戦後の重さ鐘に聞く

中森 明子

佳作 聞けなかった母のヒロシマ固い黙

福長 秀子

佳作 許すこと知って話が楽に聞け

原 憲子

佳作 そうだったのか聞けば納得裏事情

豊田 佳子

佳作 耳寄せて聞かないことにする子細

松尾 信彦

兼題 「明日」

山本 恵子 選

特選 今日こそは明日こそはで古稀が過ぎ

鑑原 義則

特選 明日への夢も描ける恢復度

吉川 美佐子

特選 生きてます明日の余命も知らぬまま

豊田 芳香

佳作 もがく日々明日の夢見た二番館

金子 文彦

佳作 明日信じ遠出のプラン立てている

福澤 陽一郎

佳作 明日なんて当てにならない河豚食べる

田中 美代子

佳作 また明日疑いもなく言えた歳

近末 夕子

佳作 シナリオになかった出会い明日が見え

江川 美栄